

体験が能力を伸ばす

石井：脳障害児を持つ父親の手紙(月刊『幼児開発』七五年二月号掲載)の中にもありますがね、“馬”という漢字を教えるために競馬場の厩舎まで連れていっているんですよ。普通の子供だったら絵本で十分だと思うんですが、その子の場合「これが馬だ」と厩舎で見せて、そのついでに“馬”という字を教えますといっぺんに覚えちゃう。この子は、こういう体験による漢字指導を受けて一日に一文字ずつの割合いでどんどん覚えていきました。

山田：障害児ですか……。

石井：脳障害児です。

山田：IQはどのくらいなんですか。

石井：IQはこの子の場合、測定が困難ではなかったかと思います。

山田：もう一つご質問したいんですが、脳の発育は、ハードウェアとソフトウェアの部分があって、ハードウェアは三歳ごろまでにできあがってしまい、四歳ごろからソフトウェアが作られていくというんですが。ソフトウェアはこの本を見ますと、百二十五歳まで人

間はできるんだという。知恵遅れの子ですね、いわゆる精神薄弱者はソフトウェアができないんですか、それとも三歳までにできるという、ハードウェアができていないということですか。どうなんでしょう、子供によって違うと思いますけれど。

石井：ハードウェアが三歳までにできると言いますが、そのでき方にみんなかなりの違いがあるわけです。しかしながら、この本では脳の良し悪しをカメラにたとえて説明していますね。三千円の安いカメラだからと言って、でき上がった作品が悪いとは限らないわけです。十萬円のカメラだって、それを使う技術を養わない限りは、つまりそれはソフトということになりますが、それをやらないといい作品ができない。たとえ三千円のカメラでも、ソフトの方をしっかりとやれば立派な作品ができる、こういう考え方です。だから私どもはよほど頭脳の方がそこなわれていても、適切な学習さえすれば、ソフトの面でいくらでもよくすることができる、つまり、リッパな働きをする頭ができる、というように考えております。